

# 府中宿 Q & A



## Q：何人くらいの方が暮らしていたの？

**A：**文政4年(1821)の調査では、1,717人(男889人、女828人)が暮らしていました。これが22年後の天保14年(1843)になると、2,762人(男1,386人、女1,376人)と、大幅に増加しています。家の軒数も253軒から430軒に増えていますので、この間に多くの方が府中宿に移住してきたことがわかります。

## Q：府中宿の旅籠屋は何軒？ どんなお店があつた？

**A：**天保14年(1843)頃の調査を基にしたと推定される「宿村大概帳」には、府中宿の旅籠屋は大小合わせて29軒と記されています。その内、給仕を名目とした遊女を置いた飯盛旅籠が、8軒ありました。その他、天保12年(1841)の調査では、一膳飯屋や茶屋をはじめ、髪結・湯屋・質屋・荒物屋等を営む、55人の名前が確認できます。

## Q：火事もあつた？

**A：**下の表のように、府中にも記録に残る大火が何度かありました。天保6年(1835)の場合、夜10時頃に新宿の東端近くで出た火は、2時間程の間に宿場全体に広がりました。

西暦	年月日	火元	類焼地区
1646	正保3年10月12日	本町	府中御殿・六所宮
1788	天明8年2月27日	新宿	新宿
1826	文政9年	本町	本町
1829	文政12年12月27日	本町	番場・本町
1835	天保6年12月24日	新宿	新宿・番場・本町
1854	安政元年6月		宿内
1859	安政6年12月13日	番場	番場・本町

## Q：府中宿はいつ頃できたの？

**A：**府中宿の成立年は定かではありませんが、文禄3年(1594)に、府中宿の「伝馬屋敷検地帳」が作成されたことが、江戸時代後期の記録からわかっています。この当時は「府中町」というひとつの町でしたが、慶長15年(1610)に3か村に分かれたことを記した書付が残っています。甲州街道のルートが変わり、府中宿全体の町並が整ってくるのは、17世紀の半ば頃と考えられています。

## Q：甲州街道に大名行列は通ったの？

**A：**3代将軍家光の時代に参勤交代が制度化されると、定期的に大名行列が街道を通行するようになりました。文政5年(1822)には、各大名の道順が決められましたが、甲州街道を使うのは高遠藩、飯田藩、諏訪藩の3藩のみでした。東海道は146藩が使用したといえますから、交通量の違いがわかります。その他、甲州街道に特有な武士の公用の旅として、享保9年(1724)に設置された甲府勤番の往来がありました。

## Q：どんな人が府中に来たの？

**A：**甲州方面から、ぶどうなどの品物を江戸へ運ぶ、商売上の通行もありましたが、江戸から“観光客”として訪れる人もいました。江戸時代後期になると、名所・旧跡を訪ねる旅が流行しました。小金井桜や国分寺を見て、古代武蔵国府が置かれた府中に足を伸ばすのは、江戸からの近距離旅行として人気のコースでした。狂歌師として有名な大田南畝や、『遊歴雑記』の著者の十方庵敬順も、観光で府中宿を訪れています。

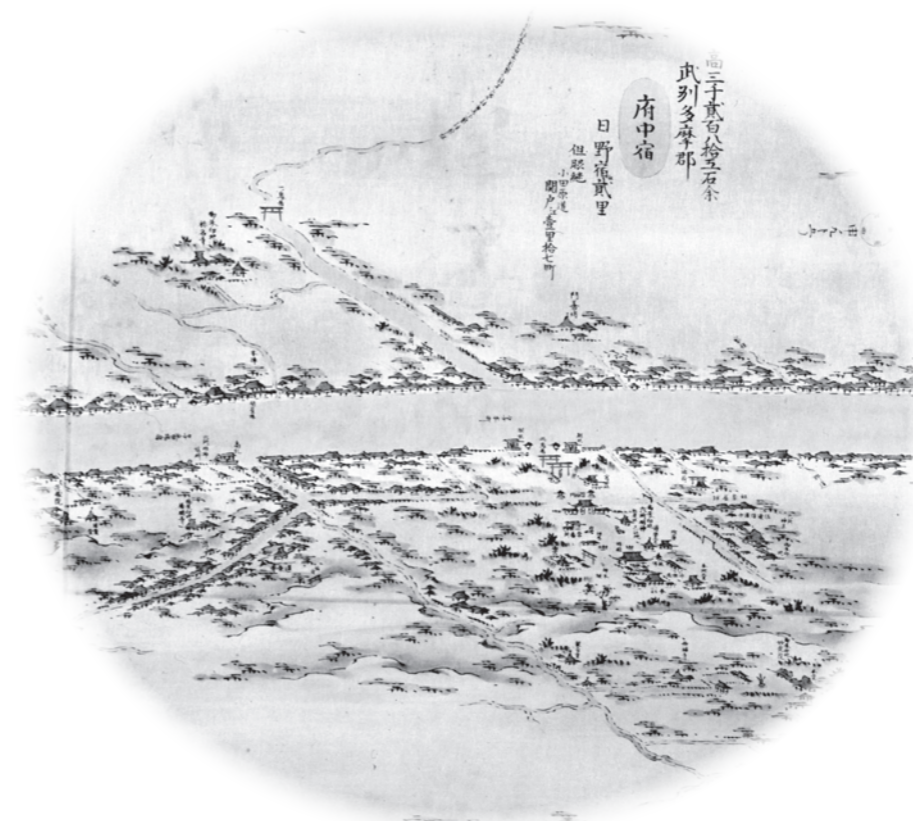
## Q：いつまで宿場だったの？

**A：**江戸から明治へ時代がうつると、政府によってさまざまな改革が行われます。明治5年(1872)には、宿場の制度が廃止され、府中宿もその役割を終えました。その後大正5年(1916)の京王電気軌道(京王線)の開通により、東京近郊の街として新たに発展していきます。このように宿場の役割は失われ、町並も時代とともに変化しましたが、今でも府中の町なかにその名残を見ることができます。ぜひ、探してみてください。

# 甲州街道府中宿

展示解説シート "Fuchu Juku" along the Koshu Highway

府中市郷土の森博物館



甲州街道分間延絵図複製(部分) 原資料:東京国立博物館蔵

江戸幕府は主要道路として、江戸に日本橋を起点に東海道・中山道・奥州街道・日光街道・甲州街道の五街道を設置しました。甲州街道は、府中や八王子を通り、甲府(山梨県)を経て、下諏訪(長野県)で中山道に合流します。街道には宿場が設けられ、公用の移動のための人馬や宿泊施設を提供していました。府中宿は日本橋から7.7里(約30km)に位置し、内藤新宿、高井戸宿、布田五宿に続く、甲州街道の4つ目の宿場でした。



府中宿町並模型(部分) 江戸後期から明治初期の府中宿の様子

# 府中宿

府中宿は、本町・番場宿・新宿の3か村で構成されています。右のマップは、宿場全体の町並が整った17世紀半ば以降のもので、

府中宿の情報を記した江戸時代後期の史料では、宿場の範囲を甲州街道沿い11町6間(約1.2km)、相州道沿い3町50間(約0.4km)としています。

## 本町【図① エリア】

大部分は甲州街道ではなく、相州道に面した町並です。3か村の中では一番古く、江戸時代以前からありました。

## 番場宿【図② エリア】

六所宮を境に西に延びる町並です。古くは茂右衛門宿と呼ばれていました。北側の町並は本町をはさんで東西に分かれていました。

## 新宿【図③ エリア】

六所宮の東側に位置し、古くは采女宿と呼ばれていました。この町並は、17世紀の半ば頃に甲州街道のルート変更が行われてから形成されたと考えられます。



### ワンポイントカーいせつ

府中宿では、ひと月を3つに分けて、本町・番場宿・新宿が交替で宿場の役割を果していたんだよ。これらの3か村は、行政的には村なんだけど、まとめて府中三町とも言ったんだ。

# 宿場の役割

電車も自動車もない江戸時代、公用の人や荷物の移動は、その運搬を担う人馬を宿場ごとに取り替えて、リレー方式で行われていました。府中宿は、西への移動は日野宿まで、東へは布田五宿までを担当していました。

その際、人馬の手配などの宿場に課せられた役割を担う役所を問屋場、そのなかの責任者を問屋といいました。また、大名などの宿泊には本陣や、その補助機関である脇本陣が使用されました。

## 問屋場【図①②③④】

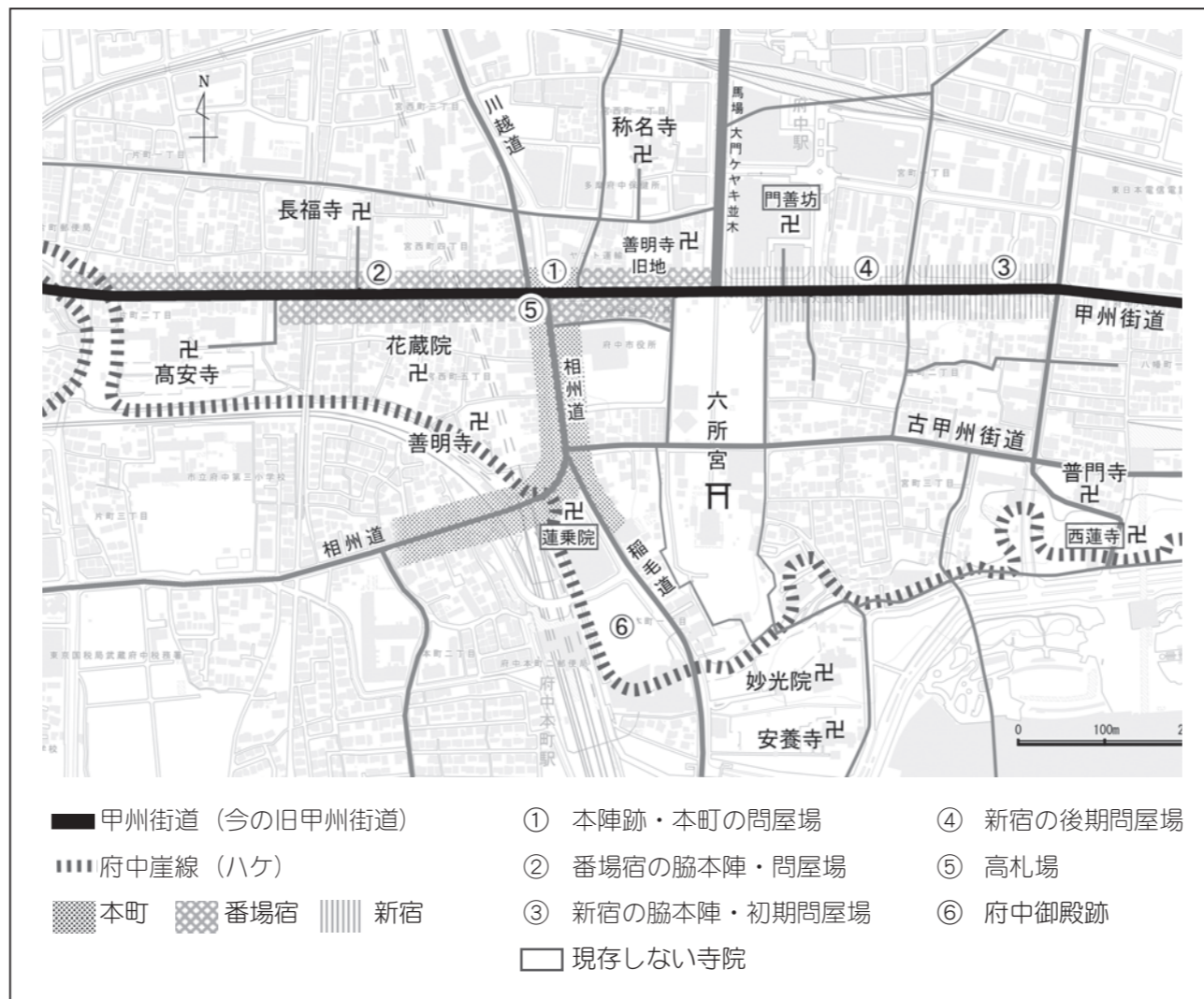
問屋場は、本町・番場宿・新宿に1か所ずつあり、その時宿場の役割を担当している村の問屋場が使用されました。新宿の問屋場は、江戸時代中期には③にありましたが、後期になると④に移りました。

## 本陣跡【図①】 脇本陣【図②③】

府中宿の本陣は、本町の問屋でもあった三郎右衛門の家屋でした。しかし天保6年(1835)の火事で焼けたため、その後は宿内の有力者の家屋を交替で使用するようになりました。一方脇本陣は、番場宿と新宿に1か所ずつありました。

# 府中宿散歩

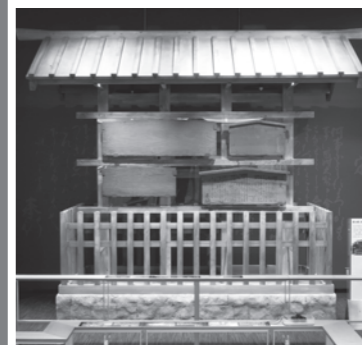
展示を見たら町へ出て歩いてみましょう  
隠れた江戸のなごりを見つけてください



# 府中宿の中心地

## 高札場【図⑤】

現在も府中市役所近くの交差点に残る高札場は、江戸時代の姿を残す貴重な文化財として、東京都の旧跡に指定されています。この場所は、甲州街道と相州道が交わる宿場の中心地で、幕府の庶民に対する基本政策や、次の宿場までの距離と駄賃銭の額などが板面に記された高札が掲げられていました。



江戸時代の高札場の模型



### ワンポイントカーいせつ

この高札場は、府中三町と六所宮の神領だった八幡宿村のものだったんだ。江戸時代後期には、全部で10枚の高札がかかっていたよ。

## 六所宮

江戸時代まで、現在の大國魂神社は、六所宮、六所明神、六社様などと呼ばれていました。徳川家康が寄進した社領500石は、当時武蔵国内の寺社では最高で、中堅の旗本と同程度でした。

府中宿のほぼ中心にある六所宮は、ランドマークであるとともに、武蔵総社として人びとの信仰を集めていました。現在「くらやみ祭」として有名な5月の例大祭には、近隣のみならず、江戸からも多くの人々が詰めかけました。



大國魂神社の本殿  
都指定文化財

正保3年(1646)の火事で焼失し、寛文7年(1667)に再建されました。

# 府中のランドマーク

## 府中御殿跡【図⑥】

御殿は、戦国大名たちが支配地内に造った休泊施設です。府中御殿は天正18年(1590)、奥州平定に赴いた豊臣秀吉の帰路の宿舎として、徳川家康が造営したと伝えられるものです。江戸時代初期には、家康や2代将軍秀忠が、鷹狩や鮎見物の際に訪れていました。また、家康の霊柩を久能山(静岡県)から日光(栃木県)に遷す途次にも、使用されました。しかし、次第に使われなくなり、正保3年(1646)の大火で類焼した後は、再建されませんでした。

# 府中の旧跡



### ワンポイントカーいせつ

公用のために人馬や宿泊施設を提供しても、その賃金はゼロ、もしくは少額だったんだ。この不足分を補うため、宿場には旅籠屋や運送業の営業、市の開催が許されていたんだよ。なかには、遊女を置いた飯盛旅籠もあったんだ。



武蔵府中国府台勝概一覽図(部分) 個人寄託



### ワンポイントカーいせつ

江戸時代後期、庶民の間に名所・旧跡を巡る旅行が流行すると、府中御殿跡も観光地として整備されたよ。左の図は、その頃の御殿跡地を描いたガイドマップ! ○で囲んだ部分には見晴らし台が築かれたていたんだ。最高のロケーションだったからね!